

第7回 中之島映像劇場

草創期～1946年

日本の 漫画映画の 誕生と発展



東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵作品を中心に

A History of Japanese Animated Cartoons

From Their Beginnings to 1946

Co-organized with National Film Center,

The National Museum of Modern Art, Tokyo

2014/03/14
03/15
03/16
の

入場無料 全席自由 ※各プログラム入れ替え制です

整理券

▼先着130名/1名様につき1枚

▼3月14日(金)は、15時よりAプログラムの整理券を配布します

▼3月15日(土)と3月16日(日)は、10時より当日の各プログラムの整理券を配布します

国立国際美術館B1階講堂

描いた絵を動かしたい

今日、この国の「アニメ」が世界を席巻していると言われてます。広い意味での「美術と映像」という視点から、その源流の一つとしての「漫画映画」を取り上げます。その場合、根元に存在する「描いた絵を自らの手で動かしたい」という創造的な欲求が重要と考えられます。このような欲求が多様な領域を横断し、突き抜けていく中で、日本の漫画映画が誕生し、発展していったのです。

まずは明治時代後期と推定される印刷式漫画映画と、影響を与えた海外作品を振り返ります。このような地ならしを経て1917(大正6)年に製作された最初の漫画映画を手始めに、戦前・戦中の興隆を辿り、敗戦後の1946(昭和21)年に製作された復活の希望を预示するような作品までを対象とします。

最新の研究とフィルム発掘の成果を踏まえ、共催の東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵の35mmフィルムを中心に、他の機関からの借用も含め、長短49本の作品を全部で7つのプログラムに分けて紹介します(参考作品も含めた合計上映時間は、約9時間30分です)。

日本における漫画映画の歴史を回顧する試みの一つとして、これまでの映画史とは異なった見え方になるのではないかと思います。どうかお見逃しないうちご高覧下さい。

主催：国立国際美術館、東京国立近代美術館フィルムセンター
協賛：公益財団法人ダイキン工業現代美術振興財団
協力：神戸映画資料館、株式会社マツダ映画社、有限会社キャリアーメン
映写器材/映写担当：有限会社シネマトグラファー
＜国立国際美術館＞ 〒530-0005 大阪市北区中之島4-2-55
＜お問い合わせ＞ 06-6447-4680(代表)
＜URL＞ <http://www.nmao.go.jp/>

国立国際美術館 THE NATIONAL MUSEUM OF ART, OSAKA

東京国立近代美術館フィルムセンター National Film Center The National Museum of Modern Art, Tokyo



本上映会は「美術と映像」の視点から1946年までの漫画映画を取り上げますが、その際、以下のような論点を設定しています。

1. 海外からの影響 (画家が観客の眼前で絵を描いていく大衆演芸／「凸坊新画帖」／「ベティ・ブーブ」や「ポパイ」)
「漫画映画」は美術に関わる (あるいは、他の一般的な) 事柄と同じく、海外からの影響を受け、その摂取を通して誕生、発展していきました。
2. 漫画映画の製作者たちとその体制 (画家や漫画家／見よう見まねの独学での技術習得／手仕事／アマチュア的なあり方)
作品の製作は、個人の作家の創造欲求が大きな原動力となっていました。今日そうであるような大規模な製作体制はそれほど普及せず、プロとアマチュアとの境界は曖昧であったと考えられます。
3. 漫画映画の製作技術 (印刷と撮影／他の領域との関連性／トーキー化／色彩)
「漫画映画」の製作には原画をカメラで撮影するだけでなく、フィルムに印刷したり、描いたりする方法もありました。コンピュータを用いた、現在の「アニメ」の製作工程に類似していると指摘出来ますが、さらに、動く玩具や幻燈との関連性も浮上してきます。
4. 漫画映画の受容の場 (映画館と家庭／玩具映画)
「漫画映画」を視ることは映画館だけでなく、家庭においても例えば「玩具映画」という形で行な

れていました。現在のビデオやDVDによる作品視聴と似たような状況と言えます。小型の16mmフィルムによる学校などでの上映も盛んでした。

5. 国策との関係：特に戦時体制下の問題
一つの史実として、戦時下のプロパガンダ作品も現在において上映するべきであると考えます。

今回のプログラム構成や作品選定に関して、これらの論点を反映するようにしています。

おことわり：

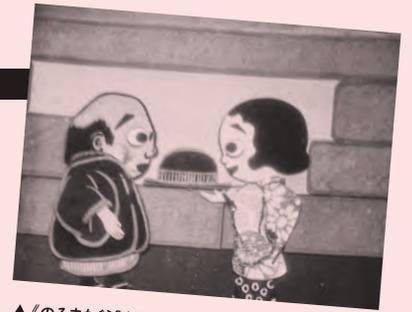
- * 各プログラムの作品、および、上映順に変更がある場合があります。
- * 作品タイトルや監督名に関しては、東京国立近代美術館フィルムセンターのデータベース情報を基に、山口且訓・渡辺泰著／プラネット編『日本アニメーション映画史』(有文社／1977年)ほかを参考に追加しています。
- * 作品の画面や音質の良いものや、台詞が聞き取りにくい場合があります。歴史的な作品であることをご考慮いただき、ご了承下さい。
- * フィルムは、特記以外は35mmです(9.5mmや16mmからの拡大複写版を含みます)。
- * フィルム所蔵は、特記以外は全て東京国立近代美術館フィルムセンターです。

2014 / 03 / 14 FRI

▶《児童唱歌映画 村祭[デジタル復元版]》(1930年)



▲《活動写真[仮題]》(明治時代後期)



▲《のろまな爺[白黒ボジ部分染色版]》(1924年)

▼《なまくら刀[デジタル復元版/白黒ボジ染色版]》(1917年)



▲《煙り草物語[不完全版]》(1926年)



▲《春の唄》(1931年)

A PROGRAM

(105分/冒頭に解説付き)

17:00-

●海外作品の影響と日本の漫画映画の創成 1920～30年代：興隆期：1： 大藤信郎作品選

歴史を辿っていくと、明治時代後期にはフィルムに直接印刷し、撮影を行なわないう形で漫画映画が作られていました。輸入品も含めて家庭で楽しんでいたとされますので、手回し映写により再現してみます。

日本で最初の漫画映画が製作・公開されたのは1917(大正6)年。幸いにして2007年、その内の一本が発見されました。今回上映する幸内純一《なまくら刀》です。

日本を刺激した海外の作品群をご覧いただいた後、1920年代から盛んになる漫画映画製作の第一人者の一人、影絵や千代紙を用いて製作していた大藤信郎の初期作品を、昨年(2013年)発掘された《のろまな爺》を含めて、まとめてご紹介いたします。

本プログラムでは作品の上映順序が製作年順となっていないので、ご注意下さい。

幻燈と動く玩具から漫画映画へ(35mm手回し映写機/映写と解説/8分) 松本夏樹所蔵/映写/解説

- ・ 作者不詳
《活動写真[仮題]》
(明治時代後期/35mm/1分(ループ)/サイレント)
- ・ 同時期の作品2本
松本夏樹：1952年大阪生まれ。大阪芸術大学・武蔵野美術大学非常勤講師。芸術全般の視覚表現と精神史領域の関連研究の一端として、映像前史の幻燈や光学機器、初期映画フィルムとその映写機を収集し、映像文化史的観点からの再現上映研究を行っています。

海外秀作選(21分)

- ・ エミール・コール(1857～1938年)
《ファントージュたちの恋のさやあて》
(1908年/フランス/ゴモン/4分/35mm/サイレント)
- ・ Émile Cohl, *Drame chez les Fantoche*
- ・ オスカー・フィッシー(1900～67年)
《光の交響楽 ルビンシュタインの光の踊り》
(1932年/5分/35mm/サウンド)
- ・ Oskar Fischinger, *12. Studie - "Lichtertanz"*
- ・ ロッテ・ライニガー(1899～1981年)
《幸運の女神》
(1930年/コメニウス・フィルム/12分/35mm/サウンド)
- ・ Lotte Reiniger, *Die Jagd nach dem Glück*

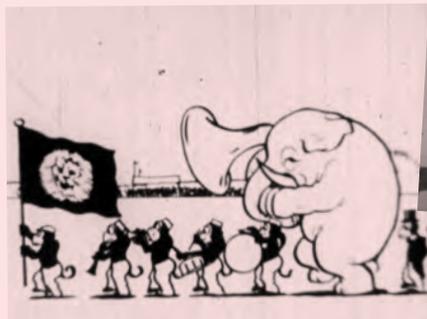
参考上映「海外作品アンソロジー(1930年代)」(15分) マツダ映画社所蔵
* 家庭での観賞用に短くして市販されたものを集めています。

日本最初の漫画映画(4分)

- ・ 幸内純一(1886～1970年)
《なまくら刀[デジタル復元版/白黒ボジ染色版]》
(1917年/小林商会/2分/35ミリ/サイレント)
- ・ 北山清太郎(1889～1945年)
《浦島太郎[デジタル復元版/白黒ボジ染色版]》
(1918年/日活向島/2分/35ミリ/サイレント)

大藤信郎(1900～61年) 作品選(40分)

- ・ 《のろまな爺[白黒ボジ部分染色版]》
(1924年/5分/35ミリ/サイレント) 神戸映画資料館所蔵
- ・ 《煙り草物語[不完全版]》
(1926年/東京自由映畫社/3分/35ミリ/サイレント/染色)
- ・ 《馬具田城の盗賊》
(1926年/自由映画研究所/11分/35ミリ/サイレント)
- ・ 《黒ニヤゴ[デジタル復元版]》
(1929年/千代紙映畫社/3分/35ミリ/サウンド)
- ・ 《児童唱歌映画 村祭[デジタル復元版]》
(1930年/千代紙映畫社/3分/35ミリ/サウンド/デスメットカラー)
- ・ 《春の唄》
(1931年/千代紙映畫社/3分/35ミリ/サイレント/染色)
- ・ 《蛙三勇士》
(1933年/千代紙映畫社/7分/35ミリ/サイレント/調色)
- ・ 荻野茂二(1899～1991年)
《色彩漫画の出来る迄》
(1935年/5分/35ミリ/サイレント/カラー)



▲《動物オリムピック大会[サクラグラフィ版]》(1928年)



▲《のらくろシリーズ のらくろ二等兵》(1935年)



▲《お猿の三吉 突撃隊》(1934年)



▲《茶目子の一団[パテートキー版/デジタル復元版]》(1931年)



▲《長篇漫画 西遊記・鐵扇公主の巻 [日本語吹き替え版]》(1941年)

B PROGRAM

(60分/冒頭に解説付き)

11:00-

●1920~30年代: 興隆期: 2

日本の漫画映画のいわば興隆期に当たる1920~30年代。《蟹満寺縁起》は影絵による作品です。監督の一人、木村白山は多数の玩具映画の作品製作も行っていました。後に《飢餓海峽》(1965年)を監督する内田吐夢も監督の一人でした。

山本早苗は北山清太郎のスタジオで技術を身に付け、後に自身の会社を設立。戦後は東映動画(1956年発足)に関わり、大資本によるアニメーション製作への道を開きました。

そして、多くの傑作をものにしたのが村田安司です。輪郭線による線画の描画力と絵の動きの点で、卓越した存在でした。

- ・ 奥田彦彦(生没年不詳)・木村白山(生没年不詳)・内田吐夢(1898~1970年)
《蟹満寺縁起》
(1924年/朝日キネマ合名社/11分/35ミリ/サイレント)
- ・ 山本早苗(1898~1981年)
《教育お伽漫画 兎と亀》
(1924年/中島活動写真部/6分/35ミリ/サイレント)
- ・ 村田安司(1896~1966年)
《動物オリムピック大会[サクラグラフィ版]》
(1928年/横浜シネマ商会/11分/35ミリ/サイレント)
- ・ 村田安司
《漫画 二つの世界》
(1929年/文部省(横浜シネマ商会)/15分/35ミリ/サイレント)
- ・ 村田安司
《新版 月の宮の王女様[サクラグラフィ版]》
(1934年/横浜シネマ商会/11分/35ミリ/サウンド)

▼《蟹満寺縁起》(1924年)



▲《教育お伽漫画 兎と亀》(1924年)

C PROGRAM

(109分)

13:00-

●1930年代: 多様化と充実

昭和に入り漫画映画の製作が多様化してきます。アマチュア映画作家の田中喜次を含む童映社(京都市)は子ども向けの作品を作り、上映する運動を行っていました。婦人之友社による《三匹の小熊さん》は、前衛芸術から左翼運動に投じた村山知義たちが監督しています。大石郁雄の《動絵狐狸達引》が示すように作品の出来も向上し、とりわけ西倉喜代治の《茶目子の一団》は、実験的な試みが成功した印象的な作品となっています。

この時期、日本の漫画映画は二人の巨匠を生みます。政岡憲三と瀬尾光世です。政岡は京都に自らの漫画製作スタジオを建設、妥協を許さない製作態度で作品を世に送り出しました。「日本アニメの父」とも評されています。他方、瀬尾は政岡の弟子として漫画製作を習得し、後に独立。以後、数々の作品を発表していきます。《一寸法師 ちび助物語》では、漫画製作過程での繰り返しを作品に露呈するという一種の皮肉の味が利いています。

- ・ 田中喜次(1907~82年)
《煙突屋ペロー-[1987年 再公開サウンド版]》
(1930年/童映社/23分/16ミリ/サウンド)
- ・ 西倉喜代治(生没年不詳)
《茶目子の一団[パテートキー版/デジタル復元版]》
(1931年/協力映画製作社/7分/35ミリ/サウンド)
- ・ 村山知義(1903~46年)・村山知義(1901~77年)・岩崎昶(1903~81年)
《三匹の小熊さん》
(1931年/婦人之友社/12分/35ミリ/サイレント)
- ・ 大石郁雄(1901~44年)
《動絵狐狸達引[うごきえりのたてひき]》
(1933年/東宝教育映画株式会社/11分/35ミリ/サウンド)
- ・ 片岡芳太郎(1907~82年)
《漫画證城寺の理囃子 塙右衛門(塙右衛門化物退治の巻)》
(1935年/日本マンガフィルム研究所/9分/35ミリ/サウンド)
- ・ 瀬尾光世(1911~2010年)
《お猿の三吉 突撃隊》
(1934年/日本マンガフィルム研究所/9分/35ミリ/サウンド)
- ・ 瀬尾光世
《一寸法師 ちび助物語》
(1934年/旭物産合資会社映画部/10分/16ミリ/サイレント)マツタ映画社所蔵
- ・ 瀬尾光世
《のらくろシリーズ のらくろ二等兵》
(1935年/瀬尾発声漫画研究所/11分/35ミリ/サウンド)
- ・ 政岡憲三(1898~1988年)
《茶釜音頭》
(1934年/政岡映画美術研究所/10分/35ミリ/サウンド)
- ・ 政岡憲三
《へんけい対ウシワカ[断片]》
(1939年/日本動畫研究所/7分/35ミリ/サウンド)

D PROGRAM

(99分)

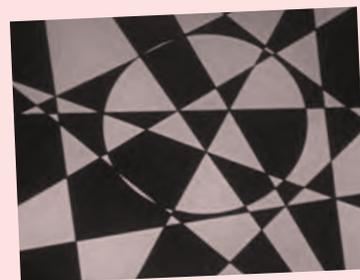
15:00-

●1930~40年代: アマチュア映画作家の活躍+ 中国からの発信

漫画映画の幅広さを示すものとして、当時のアマチュア映画作家たちの様々な試みが挙げられます。残存している作品が少ない中、荻野茂二は比較的多数のフィルムが遺されています。人形を使ったり、ヴァルター・ルートマンやオスカー・フィッシーンガーの影響を受けたような抽象的な実験。さらにはカラー映画への挑戦も行っています(Aプログラムでも1本上映します)。

日本に先駆けて中国で長編の漫画映画、《長篇漫画 西遊記・鐵扇公主の巻》が製作されました。ディズニー作品その他の影響を見て取れますが、日本の漫画映画界には大きな衝撃となり、興行的にも多数の観客を集めたと言われています。

- ・ 荻野茂二(1899~1991年)
《FELIXノ迷探偵》
(1932年/10分/35ミリ/サイレント)
- ・ 荻野茂二
《?,三角のリズム,トランプの争》
(1932年/4分/35ミリ/サイレント)
- ・ 荻野茂二
《百年後の或る日》
(1933年/11分/35ミリ/サイレント)
- ・ 荻野茂二
《RHYTHM(リズム)》
(1935年/2分/35ミリ/サイレント)
- ・ 荻野茂二
《PROPAGATE(開花)》
(1935年/4分/35ミリ/サイレント)
- ・ 荻野茂二
《AN EXPRESSION(表現)》
(1935年/3分/35ミリ/サイレント/カラー(キネマカラー))
*赤青2色のフィルターを使うキネマカラー方式による作品。
- ・ 萬籟鳴(1900~1997年)・萬古蟻(1900~1995年)
《長篇漫画 西遊記・鐵扇公主の巻[日本語吹き替え版]》
(1941年/中華連合製片公司/65分/35ミリ/サウンド)



▲《PROPAGATE(開花)》(1935年)



▲《アリちゃん》(1941年)



▲《桃太郎 海の神兵》(1944年)



▲《マレー沖海戦》(1943年)



▶《お蝶夫人の幻想》(1940年)



▶《桃太郎の海鷲》(1942年)



▶《桜(春の幻想)》(1946年)

E PROGRAM

(60分/冒頭に解説付き)

11:00-

●1940年代： ある頂点

既に日中戦争が始まり、太平洋戦争へと国中がなだれ込んでいく1940年代、日本の漫画映画はある意味で高揚期を迎えます。映画製作が国家統制下にあり、国策が圧力となっている一方で、作家たちはそれなりの自己の思いを貫いていたのではないでしょう(製作期間が延びて、この時期に公開となったという経緯もあります)。荒井和五郎はアマチュアから映画製作を本業とするようになりました。《お蝶夫人の幻想》のような影絵を使った叙情的作品で知られています。

瀬尾光世の《アリちゃん》と政岡憲三の《くもとちゅうりっぷ》は、1940年代の傑作としてだけでなく、日本の漫画映画の達成を示す作品として重要なものです。

- ・荒井和五郎(1907~95年)・飛石仲也(生没年不詳)
《お蝶夫人の幻想》
(1940年/朝日映画/12分/35ミリ/サウンド)
- ・瀬尾光世
《あひる陸戦隊》
(1940年/文部省(芸術映画社)/13分/35ミリ/サウンド)
- ・瀬尾光世
《アリちゃん》
(1941年/文部省(芸術映画社)/11分/35ミリ/サウンド)
- ・政岡憲三
《くもとちゅうりっぷ[デジタル復元版]》
(1943年/松竹株式会社/15分/35ミリ/サウンド)



▶《くもとちゅうりっぷ [デジタル復元版]》(1943年)

F PROGRAM

(145分)

13:00-

●1940年代： 戦時体制下のプロパガンダ と長編の試み

戦時体制の下、戦意を高揚させ、敵国への敵愾心を煽る、いわゆるプロパガンダ映画が製作されましたが、漫画映画についても例外ではありませんでした。あるいはこうした状況において、むしろ漫画映画の持つ訴求力に期待が掛けられたとも言えます。Gプログラムで紹介した荒井和五郎と飛石仲也が《ニッポンバンザイ》を製作しているのも、典型的な例でしょう。フィルムなどの資材不足の中、長編の作品が作られました。

瀬尾光世の《桃太郎 海の神兵》は既に空襲が激しくなり、営業している映画館も少なく、また、観客もあまりない頃に公開されました。若き手塚治虫が1945年4月に焼け跡が目立つ難波の映画館でこの作品を見ている。直後の日記の記述とは別に、後年、感激のあまり泣いた旨書き残しています。戦中と戦後を結ぶ逸話の一つと言えます。

- ・荒井和五郎・飛石仲也
《ニッポンバンザイ》
(1943年/朝日映画/11分/35ミリ/サウンド)
- ・大藤信郎
《マレー沖海戦》
(1943年/横浜シネマ/27分/35ミリ/サウンド)
- ・瀬尾光世
《桃太郎の海鷲》
(1942年/芸術映画社/33分/35ミリ/サウンド)
- ・瀬尾光世
《桃太郎 海の神兵》
(1944年/松竹株式会社/74分/35ミリ/サウンド)

G PROGRAM

(40分/冒頭に解説付き)

16:00-

●1946年： 敗戦後の復活

1945年の敗戦からわずかの間に製作された作品群。つい今しがたの災禍を忘れさせるかのような希望に満ちています。この後さらに続く戦後の受難時代を越えて、日本の漫画映画は復活し、飛躍していきます。これらの作品には、そのことを予兆させるような印象さえ受け取れます。今回、多くを紹介した大藤信郎と政岡憲三がここでも活躍します。

政岡憲三の門下である熊川正雄が戦後加わるのが、1956年発足の東映動画。他方、Fプログラム解説で触れた手塚治虫は虫プロダクションを1962年に設立します。これらのスタジオを主流として、数多くの人々がうねりに飛び込むようにして生成した流れが、現代の日本の「アニメ」に至ったと考えられます。

- ・政岡憲三
《桜(春の幻想)》
(1946年/日本漫画映画社/8分/35ミリ/サウンド)
- ・大藤信郎
《蜘蛛の糸》
(1946年/三幸スタジオ/10分/35ミリ/サウンド)
- ・熊川正雄(1916~2008年)
《魔法のペン》
(1946年/京都映画社/11分/35ミリ/サウンド)



▲《蜘蛛の糸》(1946年)



国立国際美術館

〒530-0005
大阪市北区中之島4-2-55
TEL 06-6447-4680(代表)

地下鉄四つ橋線「肥後橋駅」
(3番出口)より西へ徒歩約10分

京阪電車中之島線「渡辺橋駅」
(2番出口)より南西へ徒歩約5分

展覧会情報

本上映会時には以下の展覧会を開催中です。

- ・「アンドレアス・グルスキー展」
- ・コレクション4「現代美術100年の実り」
- ・特集展示「郭徳俊 ニッコとシェー 1960年代 絵画を中心に」

2014年2月1日(土)~5月11日(日)

<URL> <http://www.nmao.go.jp/>



▲《魔法のペン》(1946年)